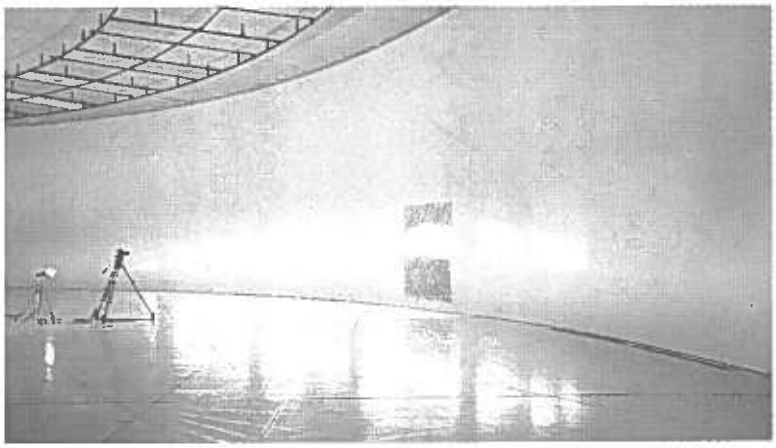
光のドキュメンタリー

アートの現場から
ACAC通信

青森公立大学国際芸術センター青森（ACAC）では、4月20日（土）から二つの展覧会を開催しています。一つは石田尚志さんの「弧上の光」、もう一つは弘前在住の塚本悦雄さんによる「彫刻フアーム」です。今回は石田尚志さんの展覧会についてご紹介します。

石田さんの作品の最大の特徴は、「ドローイング・アニメーション」という手法で制作する映像作品です。これは、ひと筆線を引いては写真を撮り、また少し線を描いては写真を撮り、ということを繰り返して撮りためた膨大な量の写真をつないで映像を作るという手法です。原理としては、昔のセル画で作られたアニメと同じです。石田さんは線が生まれる瞬間や、それによって空間や時間が立ち上がっていくことをどうしたら表現できるかを考えてこの手法にたどり着いたと言います。言うは易し、ですが、今回出品された作品の中には1年がかりで制作されたものがあったり、丸1日制作をしても映像では1～2秒にしかならなかったりと、その仕事はとんでもなく根気のいるものです。



石田尚志《弧上の光》（部分）、HDビデオ（カラー）、3分19秒、2019年　©takashiishida

今回石田さんは1月末から4月まで断続的にACACに滞在し、いくつかの新作を制作しました。その中の一つで展覧会のタイトルにもなっている《弧上の光》は、ACACのギャラリーAで3月の約2週間で制作された作品です。ギャラリーAは上部に窓があり、夕方になるとそこから直射日光が差し込みます。本作では、壁に掛けられた大きな正方形のキャンバスが少しずつ線で埋まっていく様子と共に、ギャラリーの中で光が動く様子も捉えられています。キャンバスに描かれる線がどんどん密度と重力を増して行くのとは対照的に、白から黄へと光の色が変化し、窓の外の何かによって生まれる影と光が軽やかに動いていく様子は、普段ギャラリーの様子を見慣れている私達スタッフにとっても、胸が詰まるほどのドラマチックな美しさがあります。

石田さんの映像作品は石田さんの創作行為を捉えるドキュメンタリーとも評されますが、本作は、石田さんがACACの建築をも捉えたドキュメンタリーと言えるでしょう。ACACのギャラリーで毎日、このような美しい出来事が起こっているということを改めて見せてくれた石田さんの作品を見て、アーティストの環境の認識能力やそれを見せる技術に敬服の念を抱きます。

展覧会は6月16日（日）まで、開館時間は午前10時～午後6時。会期中無休、入場無料です。

会期中は学芸員がご案内する観賞ツアーも行います。5月18日（土）は家族向け、5月19日（日）は一般向け。どちらも午後2時30分～3時30分で、申し込み不要です。

（青森公立大学国際芸術センター青森主任学芸員　金子由紀子）

※第1金曜日掲載